京都

就農7年で売り上げ1億円に成長

九条ねぎで世界に挑む

木津川市　㈱あぐり翔之屋　代表　森上翔太さん

木津川市の森上翔太さん（35）は、サラリーマン家庭出身だが、農業で起業をめざし、農業大学校で学んだ後、アメリカの牧草農場で約2年間研修。帰国後は京都府内の農業法人などで九条ねぎの技術を習得し、27歳で㈱あぐり翔之屋を設立した。

当初は、近隣の休耕田などを借りて、九条ねぎに特化した経営をスタート。現在では約14㌶で従業員26人を雇用し、一昨年に売り上げ1億円を達成。右肩上がりで成長を続けている。

自社ブランドでの販売に加え、府内の若手経営者3人で販売会社（京葱ＳＡＭＵＲＡＩ㈱）を3年前に設立。情報共有や機械の共同利用、出荷時期と生産量の調整を行い、安定した大口取引や販路開拓につなげている。

創業当初は地元のシルバー人材センターを頼って労働力を確保していたが、現在は若い日本人に加え、ベトナムやフィリピンなど海外の優秀な人材を8人確保。海外出身の従業員の育成にも貢献している。

また、世界に目を向けようと、国際農業奨学金（ナフィールドインターナショナルスカラーシップ）に応募。一昨年の日本代表（1人）に選ばれ、オーストラリアのカンファレンスを皮切りに、世界各国の先進農家や奨学生（卒業生を含む1700人）とのネットワーク作りに励む（現在はコロナ禍で中断）。

「世界の農業の実情を知り、農場の海外展開など、世界で活躍できる経営者をめざす。地域で革新的な農業を追求し、遊休農地の再生利用にもつなげたい」と今後の夢を描いている。

和服姿で九条ねぎをＰＲする森上さん

「〝和束の美しい星空と茶畑〟を農泊で伝えたい」

星空観望会で環境大臣賞

和束町　湊　善実さん

和束町杣田の茶農家・湊善実さん（72）が、昨年12月4日、岡山県井原市で開かれた第33回「星空の街・あおぞらの街」全国大会（環境省主催）で環境大臣賞を受賞した。

23年前に教育委員会の依頼で始めた「星空観望会」を現在まで継続。星空の魅力を子どもたちに伝え、美しい星空を次世代に継承する長年の活動が高く評価された。

昨年は4～11月の第2土曜日（19時30分～21時）に観望会を開催。愛用の望遠鏡を会場（和束小学校）にセットし、「和束の星空の美しさを実感できる」と好評だった。

約3㌶の茶園を経営する湊さんは、小学生の頃から星が大好きで、趣味の天体観測がライフワーク。茶業の収益で「最高級の軽自動車よりも高い望遠鏡」を購入し、観測に最適な「真夜中の茶畑」で長時間観察する姿は町内でも有名だ。

「今後、観望会に加えて、農泊にも取り組み、茶畑で昼の青空と夜の星空を体験してもらう活動に挑戦したい」と湊さんは意欲的だ。

（和束町農業委員会）

星空観望会（和束小学校）で星を解説する湊さん（昨年11月13日）

京都府支局
京都府農業会議
京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104・2
府庁西別館内
075・441・3660

ドローン映像で遊休農地を判定

舞鶴市農委会が実証実験

舞鶴高専と連携

撮影した映像と地番図を照合して正確に判定

舞鶴市農業委員会は、舞鶴工業高等専門学校（舞鶴高専）の尾上亮介教授（中立農業委員）と協力して、ドローンを活用した農地利用状況調査の実証実験を行い、荒廃農地の非農地判断への導入に向けた検討を進めている。

今回の実験は、白糸・青葉地区で昨年10月に行われ、舞鶴高専の技術専門職員（西村良平さん）が地区担当の農業委員・農地利用最適化推進委員とともに鹿原集落の農地をドローンで撮影。その映像と地番図を重ねて地区別会議（地区連）で遊休農地の判定手法を検討した。

参加した委員は、「調査の時間短縮と省力化につながる」「収穫前に調査すれば遊休農地の判定が容易」「動画と静止画が両方あれば正確に判定できる」と〝ドローン活用の効果〟を実感。尾上委員も「ドローンで撮影するだけでなく、ＡＩで非農地と判定できれば、かなり効率化できると思う」と期待する。

農業委員会では、今夏の利用状況調査で実証実験の対象地域を拡大し、ドローンの本格導入に向けた検証を重ねる予定だ。

下限面積1平方㍍の特例を活用

8市町に26世帯が移住

空き家と付随農地を有効利用

移住者による空き家と農地の有効利用を促すため、府内8市町の農業委員会が農地法の下限面積を1平方㍍に緩和する特例制度を導入。昨年末までに26世帯が農地を取得し、家庭菜園などに使う事例が増えている。

すでに府北部で22世帯（福知山市8、京丹波町5、舞鶴市4、亀岡市3、宮津市・伊根町で各1）、府南部で4世帯（京都市3、和束町1）が空き家と小さな農地をセットで購入。田舎暮らしを始めている。

この制度は、各市町の「空き家バンク」に登録された空き家と農地を同時取得する場合に限り、下限面積を1平方㍍に引き下げる。「空き家に付随する農地」に対象を限定し、下限面積以外の農地法の要件（全部耕作や地域調和）は満たす必要があるため、周辺の営農に支障が生じない仕組みだ。

各市町では、移住担当課と農業委員会が連携し、空き家と農地の所有者に登録を働きかけるとともに、ホームページで移住希望者への周知に力を入れている。

つないで発信

女性委員が〝つないで発信〟

12保育園・幼稚園が参加、園児400人が収穫

長岡京市「花菜摘み取り体験会」

花菜を収穫する保育園児たち（昨年12月9日）

長岡京市粟生地区の畑で、昨年11月29日から12月21日まで「花菜摘み取り体験会」が行われ、市内の保育園・幼稚園（計12園）の園児400人が参加しました。

花菜の栽培は、長岡京市都市農業振興クラブ（36人）の若手メンバーが交代で播種や水やりを行い、収穫期を迎えた畑に園児たちを招待。参加した園児たちは袋を手に「いっぱい集めるぞ」と宝探しのように収穫していました。

花菜は、タケノコ、ナスと並ぶ長岡京市の特産品ですが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で飲食店の需要が減り、農業祭の中止で市民にＰＲする機会も減りました。園児の摘み取り体験をきっかけに、保護者の方にも花菜の美味しさを知ってもらい、地産地消の拡大につながることを期待しています。

（長岡京市農業委員会・齊藤洋子委員、髙橋満子委員）

農deきらきら

自然とともに米・大豆を育てる

宮津市　ズングリファーム代表　杉山雄作さん

7年前に、三重県から宮津市奥波見の梅ケ谷集落に移住した杉山雄作さん（42）は、1・4㌶の田畑で農薬や化学肥料を使わず水稲や大豆などを生産。「ズングリファーム」の名称で、天日干しの米・大豆と加工品を販売している。

大学卒業後、リュック一つで世界中を旅する生活や、九州・沖縄に滞在して農家の手伝いをしたり、北アルプスの山小屋で働きながら日本中を旅する生活を30代前半まで続けた雄作さん。きれいな海や山と昔ながらの生活が気に入って定住した。

「自給自足のために始めた農業、今はこの地域の自然が育てた米や野菜を多くの人に食べてほしい」と話す。

米や大豆の乾燥は天日干しで、手間暇かけた商品を喜んでくれる顧客に届ける。

米粉を使った焼き菓子、煎り豆などは、妻の真実さん（42）が製造し、カフェに卸したり、イベント出店やネット販売で大人気だ。（宮津市農業委員会）

杉山さん夫妻と息子の環太くん（1）、愛犬むっくり